二〇一九年度 京都府公立高校入試問題（中期選抜）

四〇分
四〇点

一

（注）字数制限がある場合は、句読点や符号なども一字に数えなさい。

次の文章は、「古今著聞集」の一節である。注を参考にしてこれを読み、問い(1)～(4)に答えよ。

*むつるの兵衛の尉、*懸矢をはがすとて、*たうの羽を求めけるが、足らざりければ、*郎等共に「もしや持ちたる」と尋ねければ、*上六大夫と云ふ弓の上手聞きて、「この辺にたうやは見候、見よ」とaいひければ、*下人立ち出でて見て、「只今、河より北の田には見候」といふを聞きて、則ち弓矢を取りて出でたるに、たう立ちて南へ飛びけるを、上六、*矢をはげて、*左右なくも射ず、「bいづれかはこがれたる」といひければ、「しりに飛ぶをこがれたる」といふを聞きて、cなほも急がず。はるかに遠くなりて、河の南の岸のうへ飛ぶほどになりにける時、よく引きてはなちたるに、あやまたず射落してけり。むつる感興のあまり、不審をいたして問ひけるは、「など近かりつるをば射ざりつるぞ。はるかには遠くなしては射るぞ。心得ず」と尋ねければ、「その事候ふ。近かりつるを射落したらば、河に落ちて、その羽ぬれ侍りなん。向ひの地につきて射おとしたればこそ、かく羽は損ぜね」とぞいひける。心にまかせたるほど、誠に*ゆゆしかりける上手なり。

（「新潮日本古典集成」より）

注
＊むつるの兵衛の尉…源むつる。武士。
＊懸矢をはがす…矢を作る。
＊たう…トキ。古今著聞集が成立した鎌倉時代には日本全国に分布していた鳥。トキの羽は矢の材料に用いられた。
＊郎等…家来。

＊上六大夫…源むつるの家来。
＊下人…召使い。
＊矢をはげて…矢を弓の弦（つる）にかけて。
＊左右なくも射ず…すぐには矢を放たないで。
＊ゆゆしかりける…すばらしかった。

(1) 本文中のａいひければの主語である人物と、同じ人物が主語であるものは、本文中の二重傍線部（‖）のうちどれか、最も適当なものを、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア) 足らざりければ　(イ) 尋ねければ　(ウ) いふを　(エ) 聞きて

(2) 本文中のｂいづれかはこがれたるの解釈として最も適当なものを、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア) どのトキをお望みか
(イ) いつかはトキを頂けるのだろうか
(ウ) いつトキをお望みか
(エ) どのようなトキを頂けるだろうか

(3) 本文中のcなほもは歴史的仮名遣いで書かれている。すべて**現代仮名遣い**に直して、**平仮名**で書け。また、次の(ア)～(エ)のうち、波線部(～～)が現代仮名遣いで書いた場合と同じ書き表し方であるものを一つ選べ。

(ア) 力をも入れずして
(イ) よろづの言の葉とぞなれりける
(ウ) 老いを迎ふる者は
(エ) 玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば

(4) 次の会話文は、恵里さんと優一さんが本文を学習した後、本文について話し合ったものの一部である。これを読み、後の問い(一)～(三)に答えよ。

恵里　「上六大夫」がトキを射落とした時、「むつるの兵衛の尉」は「不審をいたし」たと書いてあったね。何を不思議に思ったんだっけ。
優一　本文からは、「[A]」の上空に到達するまで、「上六大夫」がトキを射なかったことを不思議に思ったと読み取れるよ。
恵里　どうして「上六大夫」は射るのを遅らせたのかな。
優一　本文を読むと、もし射るのを遅らせなかったとしたら、射たトキが「[B]」てしまうと考えたからだということがわかるよ。「[B]」たらそのことで水にぬれることになるからだね。
恵里　そうだね。トキの羽の状態にまで配慮して射落としたという話を通して、「上六大夫」が[C]ということを描いているんだね。

㈠ 会話文中の A に入る最も適当な表現を、本文中から**五字**で抜き出して書け。

㈡ 会話文中の B に入る最も適当な表現を、本文中から**四字**で抜き出して書け。

㈢ 会話文中の C に入る最も適当な表現を、次の(ア)〜(エ)から一つ選べ。

(ア) 弓矢の扱いを人に教えるのが上手だった
(イ) 弓矢の勝負では常に相手を上回る結果を残していた
(ウ) 射落とす鳥にも情けをかける人物であった
(エ) 遠くからでも自在に射当てる技量を持っていた

二

次の文章を読み、問い⑴～⑾に答えよ。

人が火を扱う能力と社会の発展は、人類の文明の歩みそのものである。人は火を使い、それを社会の中に取り込んだことで、火は社会の中でaカク散し、専門化し、集中化されていった。それは、人々の生活を快適に、そして安全にした一方で、社会は巨大化、複雑化し、火を扱う人類の能力は増大したにもかかわらず、火は個人のもとから遠ざかり、それを扱う一人ひとりの能力は縮小し、b社会に対する依存が強くなる傾向が現れた。

①、人は火を忘れたわけではない。火は私たちにとって、すべてを焼きつくすc畏怖の対象であると同時に、心と身体に温(ぬく)もりと安らぎをもたらし、人と自然を、そして、人と人とを結びつけてくれる存在である。それは、世界各地の祭りや風習に残っており、私たちの身体の奥底に刻まれている遠い昔の記憶である。人が社会の中に取り込み扱ってきた文明の火とは異質の自然の火である。自然の火は神とも結びつき、人の心のd支えとなり、また社会の規範を保ってきた。火は、文明の火と自然の火の二面性をもっている。

今や、人間社会は人口が増加し、地球の空間的、時間的な限界という壁に突き当たっている。加えて、環境問題が顕在化し、火の使用も*排出権や*炭素税など国際的な枠組みによって制限されようとしている。現代の社会は、限界を超えても無理やり成長を続けようとする力と、持続可能な安定へと軟着陸しようとするせめぎ合いの中にある。

しかし、人は誰しも成長を望むのである。人は狩猟採集生活から定住生活を始め、農耕が生まれたときに、その日暮らしから未来のために今の時間を手段化し、犠牲にして努力する未来志向型にe生き方を変え、今の経済成長型社会へと発展してきた。このような数千年の成長の流れを変えるのは容易ではない。

生物を生存に適した環境に放つと、fある時点から爆発的に増殖するが、環境の限界に近づくと減速し、安定したg平衡状態に達する。しかし、これは生物がうまく適応できた場合である。限界に達した後も環境資源を食いつくし、衰退して滅亡した愚かな生物も少なくない。地球という有限の環境に生きる人類もこの関係からは逃れられない。

人類の歴史は今まさに環境の限界に近づき、安定した平衡状態に向かいつつある。私たちはそのことを直視し、私たち自身のためにも、地球の自然と生態系のためにも、成長する社会から、成長しない、高めた水準を安定させ持続させる社会に変えていくことが必要である。

②、成長しない社会とは、消費を我慢して節約に励む社会なのだろうか。私たちが成長しない社会に暗いイメージしかもてないのは、「成長が当然」という近代の価値観にとらわれすぎているからではないだろうか。その価値観とは、人が社会の中に取り込み扱ってきた文明の火によって育まれた価値観である。

火は文明であると同時に自然でもある。火は二面性をもっている。私たちは自然の火の温もりを忘れてはいない。単に、火を使いこなし、人のｈ利便性のためだけに用いるのではなく、自然の火の記憶を呼び覚まし、それをよりよく活(い)かすことができれば、もっとよく生きることができるはずである。生きる歓(よろこ)びは、必ずしも大量の自然破壊や、他者からの収奪を必要としない。禁欲ではなく、また、原始に帰るのでもない。自然と共生して生きる方法である。かつて縄文人が自然と共生する中で心豊かな文化を築いたように、感受性を開放し自然と向き合うことで、心豊かに生きることができるはずである。

紀元前六世紀から三世紀にかけて、古代ギリシアにおける最初の哲学をはじめ、仏教、儒教、ユダヤ教などの宗教が世界各地で相次いで出現した。この時代は貨幣経済*による交易が盛んになり、巨大国家が出現し、都市化が進んだ時代である。これまで、集落の狭い有限の空間に生きていた人々が、無限の広がりをもった世界を初めて実感した。その衝撃に直面した人々が生きることのより普遍的なｉ根拠を求め、哲学や世界宗教が生み出された。近代に至る文明の始動期である。

今、人類は、生きる世界が地球という有限の空間と時間に限られているという真実に再び直面している。ｊこの現実を直視し、人類の歴史の第二の曲がり角を乗り切るために、生きる価値観と社会システムを確立していくことが大切である。その仕事に、三〇〇年とはいかないまでも、一〇〇年はかかると思われる。山を登ってたどり着いた頂きの先には素晴らしい景色が広がることを期待したい。

（西野順也(にしのじゅんや)「火の科学」より）

注

＊排出権…二酸化炭素などの温室効果ガスを排出する権利。

＊炭素税…二酸化炭素の排出抑制のため、化石燃料に課される税金。

＊貨幣経済…物と物との直接交換ではなく、貨幣をなかだちにして商品を交換する経済。

(1) 本文中のaカク散の片仮名の部分を**漢字**に直し、**楷書**で書け。

散

(2) 本文中のb社会に対する依存が強くなる傾向が現れたの理由として最も適当なものを、次の(ア)〜(エ)から一つ選べ。

(ア) 人が火を扱う能力は、社会のあり方と相互に関連しており、社会が巨大化、複雑化していく中で、人類全体としての火を扱う能力が小さくなったから。

(イ) 火が社会の中で専門化、集中化することで、一人ひとりの火を扱う能力は高度な水準に達したが、生活の中で火を扱う機会は少なくなったから。

(ウ) 火が社会に取り込まれて専門化、集中化され、一般の人々が火そのものを直接扱う機会が減った結果、自らの手で火を扱う力が低下したから。

(エ) 個人の火を扱う能力は、社会構造の変化と深く関わっており、社会が巨大化、複雑化していくことによって、個人の火を扱う能力が向上したから。

(3) 本文中の ① ・ ② に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の(ア)〜(エ)から一つ選べ。

(ア) ① だが　② つまり
(イ) ① したがって　② そして
(ウ) ① だから　② ところで
(エ) ① しかし　② では

(4) 本文中のc畏怖の読みを平仮名で書け。

(5) 本文中のd支え・fあるの品詞として最も適当なものを、次のⅠ群(ア)～(エ)からそれぞれ一つずつ選べ。また、d支え・fあると同じ品詞で支え・あるがそれぞれ用いられているものを、後のⅡ群(カ)～(ケ)から一つ選べ。

Ⅰ群　(ア) 副詞　(イ) 連体詞　(ウ) 名詞　(エ) 動詞

Ⅱ群
(カ) ある歴史的建造物は、とても太い柱で支えられていた。
(キ) いつか故郷にある介護施設で、お年寄りの生活を支えたい。
(ク) 支えを求める人に応えることは、重要なことである。
(ケ) 周囲の人々の支えがあったことに、ある日気がついた。

d □　f □　Ⅱ □

(6) 本文中のe生き方を変えについて、どのような生き方に変わったと述べられているか。最も適当なものを、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。
(ア) 今後継続して得られる利益を失ってでも、その時々における人としての成長の追求に時間を使う生き方。
(イ) 時間そのものが大きな価値を持っていると考え、すぐに利益が得られる行動を選び、その行動に時間を使う生き方。
(ウ) 将来的に利益が得られることを予測して、すぐに利益が得られない行動であっても、その行動に時間を使う生き方。
(エ) 共同体の発展という大きな目的を損なってでも、将来にわたっての個人的な利益の追求に時間を使う生き方。

(7) 本文中のg平衡の意味として最も適当なものを、次のⅠ群(ア)〜(エ)から一つ選べ。また、本文中のi根拠の意味として最も適当なものを、後のⅡ群(カ)〜(ケ)から一つ選べ。

Ⅰ群　(ア) しだいに高まること　(イ) 同時に行われること
(ウ) 全体がゆるやかなこと　(エ) つりあいがとれていること

Ⅱ群　(カ) よりどころ　(キ) 将来の指針　(ク) おおまかな理解　(ケ) ならわし

Ⅰ [ ]　Ⅱ [ ]

(8) 本文中のh利便性は、二字の熟語に漢字一字の接尾語が付いて構成されている三字熟語である。h利便性と同じ構成の三字熟語が波線部（〰）に用いられているものを、次の(ア)〜(オ)から**すべて**選べ。

(ア) 不公平な決定を批判する。　(イ) あの人はあまりに悲観的だ。　(ウ) 集団の決まりを明文化する。
(エ) 人間にとって衣食住は大切だ。　(オ) その選手は無気力だった。

[ ]

(9) 次の文章は、本文中のjこの現実に関して述べたものである。[A]に入る最も適当な表現を、本文中から**五字**で抜き出して書け。また、[B]に入る最も適当な表現を、本文中から**六字**で抜き出して書け。

人類は、地球という有限の空間に生きており、今、[A]が目の前に迫っている。仮にこのまま[A]を考慮せずに資源を使い続けたとすると、人類は[B]してしまう。

A [ ][ ][ ][ ][ ]

B [ ][ ][ ][ ][ ][ ]

(10) 筆者は、どのような価値観が現代社会の基礎となっていると述べているか。最も適当なものを、次の(ア)〜(エ)から一つ選べ。

(ア) 社会が成長していくことを前提とする価値観。
(イ) 資源の大量消費を追い求める価値観。
(ウ) 成長しないのが当たり前だと考える価値観。
(エ) 消費の抑制を重んじる価値観。

(11) 太郎さんのクラスでは、本文を学習した後、各班でテーマを決めてからグループディスカッションをすることになった。次の会話文は、太郎さんの班で話し合ったものの一部である。これを読み、後の問い㈠〜㈣に答えよ。

太郎　本文には、今が「人類の歴史の第二の曲がり角」だと述べられているけれど、それなら、「第一の曲がり角」があったということだね。それはどんなことを指しているのかな。

加奈　本文からは、［X］という有限の空間で生活していた人々がその中から出て、無限の広がりを持った世界を実感したことを、「人類の歴史の第一の曲がり角」と考えていることがわかるよ。

太郎　なるほど。それをふまえた上で、筆者は、今、人類にとって大切なことは何かを考えているんだね。

花子　うん。まず、これまでとは異なる価値観を育むことが必要だと述べているね。その育むべき価値観とは、［Y］を重視するものなんだ。そして、その価値観によって支えられた、これまでの成長の中で［Z］の仕組みを、しっかりと構築していくことが大切だと述べているんだね。

健太　そうだね。それじゃあ、1グループディスカッションのテーマは「今、人類に必要な仕組み」にしようか。

加奈　うん。そうしよう。後で発表するために、話し合った内容は私が発言の合間に2メモするね。

㈠　会話文中の X に入る最も適当な語句を、本文中から二字で抜き出して書け。

㈡　会話文中の Y に入る最も適当な表現を、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア)　温かい自然の火を思い出し、制御された文明の火を忘れ去ることで、人と自然との、そして、人と人との心豊かなつながりを実現して生きること

(イ)　心と身体に温もりと安らぎをもたらす自然の火に目を向けて、感受性を開放し自然と共生することで、精神的に満ち足りて生きること

(ウ)　人類に大きな利益をもたらした文明の火を、より細分化して社会の中に取り込むことで、困難な現実を乗り越えて生きること

(エ)　私たちの身体に刻まれた記憶である自然の火を、社会の中に取り込まれた文明の火と統一し、火の新たな側面を開放して生きること

㈢　会話文中の Z に入る最も適当な表現を、本文中から十七字で抜き出して、初めと終わりの三字を書け。

～

㈣

1 グループディスカッションについて述べた文として適当でないものを、次のⅠ群(ア)～(エ)から一つ選べ。また、話し合いの内容をメモするときにはどのように書くのがよいか、後のⅡ群(カ)・(キ)から一つ選んだ上で、そのように書くためには楷書と行書とではどちらで書いた方がよいかを、後のⅢ群(サ)・(シ)から一つ選べ。

2

Ⅰ群
(ア) 疑問点や詳しく知りたいところを質問し合うとよい。
(イ) 他の人の意見を踏まえて発言するとよい。
(ウ) 自分の考えと他の人の考えを比べながら聞くとよい。
(エ) 話し合いの前後で自分の考えが変わらない方がよい。

Ⅱ群
(カ) 重要な情報を書き落とさないよう、速く書く。
(キ) 読む人に誠意が伝わるよう、一画ずつ丁寧に書く。

Ⅲ群
(サ) 楷書　(シ) 行書

Ⅰ □

Ⅱ □

Ⅲ □

二〇一九年度

京都府公立高校入試問題（中期選抜）

一

解答

(1) (エ)　(2) (ア)　(3) なおも・(ア)　(4) ㊀ 河の南の岸　㊁ 河に落ち　㊂ (エ)

解説

(1) 「もしや持ちたる」という「むつる」の問いかけに答えた人物が、トキを探させている。(ア)の主語は「たうの羽」。(イ)の主語は「むつる」。(ウ)の主語は「下人」。

(2) 「上六」の質問に「むつる」が、最後を飛んでいるトキを望むと答えていることから考える。

(3) 語頭と助詞以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。(ア)の「を」は助詞なので現代仮名遣いと同じ。(イ)は「ず」、(ウ)は「う」、(エ)は「え」になる。

(4) ㊀「上六」はすぐには矢を放たず、「河の南の岸のうへ飛ぶほどになりにける時」になってから矢を放っている。㊁「など近かりつるをば射ざりつるぞ」と「むつる」から問われた「上六」は、「近かりつるを射落したらば、河に落ちて、その羽ぬれ侍りなん」と答えている。㊂「はるかに遠く」に飛ぶ目当てのトキを「あやまたず」射落とした「上六」について、「心にまかせたるほど、誠にゆゆしかりける上手なり」と評している。

口語訳

むつるの兵衛の尉が、矢を作ろうと、トキの羽を手に入れようとしたが、足らなかったので、家来たちに「もしかして持っていないか」と尋ねたところ、上六大夫という弓の名人が聞いて、「この辺でトキを見ることがあります、見なさい」と言うので、召使いの者が外に出て見ると、「ちょうど今、河から北の田に見えています」と言うのを聞いて、すぐに弓矢を取って外に出たところ、トキが南の空へ飛び立っていくので、上六は、矢を弓の弦にかけて、すぐには矢を放たないで、「どのトキをお望みか」と言うので、「最後に飛んでいるのが欲しい」と言うのを聞いて、それでも急がない。トキの群れがはるか遠くになって、河の南の岸の上を飛ぶころになって、弓

をよく引いて放ったところ、むつるが欲しいと言ったそのトキを正確に射落とした。むつるは感激して、不思議に思ったことについて、「どうして近くを飛んでいるときに矢を射なかったのだ。はるか遠くに行ってから射た。わからない」と尋ねたところ、「そのことでございます。近くに飛んでいたときに射れば、河に落ちて、その羽が濡れてしまったでしょう。トキの群れが向こう岸の上にさしかかったところで射落とせば、羽は損なわれません」と言った。思いのままに目標を射落とせるとは、本当にすばらしい名人だった。

二

解答

(1) 拡(散) (2) (ウ) (3) (エ) (4) いふ (5) d、(ウ) f、(イ) Ⅱ、(ケ) (6) (ウ) (7) Ⅰ、(エ) Ⅱ、(カ) (8) (イ)・(ウ)
(9) A、環境の限界 B、衰退して滅亡 (10) (ア) (11) ㈠ 集落 ㈡ (イ) ㈢ 高めた～る社会 ㈣ Ⅰ、(エ) Ⅱ、(カ) Ⅲ、(シ)

解説

(2) 社会の中に取り込まれた火は「専門化し、集中化されて」いき、「火は個人のもとから遠ざかり、それを扱う一人ひとりの能力は縮小」したと述べている。

(3) ①では、前の「火は個人のもとから遠ざかり」と、後の「人は火を忘れたわけではない」が相反する内容になっている。②では、「成長しない社会」に変える必要があることを受けて、「成長しない社会とは…なのだろうか」と問いかけ、新たな話題を提起している。

(5) dは活用のない自立語で、主語にすることができる名詞。fは活用のない自立語で、体言を修飾する連体詞。また、(カ)・(キ)の「支え」と(キ)・(ク)の「ある」は、活用のある自立語で、言い切りの形が「ウ段」の音で終わる動詞である。

(6) 農耕が生まれたときに、「その日暮らしから未来のために今の時間を手段化し、犠牲にして努力する未来志向型」に変わったことに注目。「今の時間」を未来のために使うようになったということ。

(8) 性質・状態・変化といった意味を添える接尾語は、「性」の他に「的」「化」などがある。(ア)・(オ)は、上の一字が下の二字熟語の意味を打ち消している。(エ)は、それぞれが意味を持つ三つの漢字を並べている。

(9) A、人類が「今」、直面している事態を指しているので、同様のことを述べている「人類の歴史は今まさに…向かいつつある」に着目する。B、有限であることを考慮せずに資源を使い続けた場合について、「限界に達した後も環境資源を食いつくし…愚かな生物

も少なくない」ことをふまえて、「人類もこの関係からは逃れられない」と述べている。

⑽「成長しない社会」に変えていく必要性を訴えた後で、これが否定的にとられがちなのは「『成長が当然』という近代の価値観にとらわれすぎているからではないだろうか」と述べている。

⑾㈠「有限の空間で生活していた人々が…無限の広がりを持った世界を実感した」と続いているので、紀元前六世紀から三世紀にかけての時代について、「これまで…人々が、無限の広がりをもった世界を初めて実感した」と述べているところに注目。㈡「『成長が当然』という近代の価値観」にとらわれすぎず、「自然の火の温もり」を思い出して「感受性を開放し自然と向き合うことで、心豊かに生きること」に価値を見出すべきだと述べている。㈢「人類の歴史は今まさに環境の限界に近づき、安定した平衡状態に向かいつつある」と指摘した上で、「成長する社会」から「成長しない、高めた水準を安定させ持続させる社会」に変える必要があると述べている。㈣Ⅰ、人と話し合うことで自らの考え方の誤りなどに気づくこともあるので、考えは変わってもよい。Ⅱ・Ⅲ、討論中のメモは、必要と思われることを素早く書き取らなくてはいけないので、楷書で丁寧に書くというやり方では難しい。